

リアルタイムのこころの闇と光

佐相 憲一

いのちづな。それは、人と人のこころの最後の絆である。

自殺者三万人の世の中で、飛び降りる、首を切る、首を吊る、海に消える、その寸前で踏みとどまる時、こころに灯つている他者の存在とそこ。いじめ問題にも共通だが、「誰にでも可能性がある」という認識から、共感と連帯は始まるだろう。

この詩集はいま大きな話題になっている。

現代詩が「現代」「現代」と言いながら、本当の現代社会の現役の若者たちの揺れるこころを大切に詩集を刊行していない現状を考えれば、この本を読んできた方々から次のような感想が寄せられているのもうなずける。すなわち、「ドキリとさせられた」「胸にグサツときた」「自殺関係の連作がよかった」「いまの若い人の置かれた状況を考えさせられた」など。

そのドキリは決して読者を突き放す冷たいものではない。むしろこの詩集はいま風に言うなら「癒やし系」のトーンをもっている。しかし、その「癒やし」は、問題の核心から逃避する方向のそれではなく、自らのたちまわって精神の瀬戸際を体験したものがそれを乗り越えて、他者の苦しみにもそつと寄り添おうとする方向の「癒やし」なのである。

詩「単独レース？」にはその全体が象徴的に描かれている。

単独レース？

セパレートコースを走ってきたの  
意外と ながかったから  
オープンコースに出た  
人とぶつかって すぐくやりにくい

でも

慣れるものだね

つまずいてよろけたら

沿道にいた人がささえてくれた

ルール違反かと思っいたらいいんだって

知らなかった

沿道のはずが

同じ道の上だったし

まったく わたし

なにをみてきたんだろう

ん？

作者は一九八一年の生まれである。ちょうど世間では校内暴力などの教育の荒廃や、米ソ冷戦の緊迫した核の危機などが話題になっていった頃であり、アナログからデジタルへ時代が変わっていった頃でもある。作者が思春期を迎えた一九九〇年代と言えば、バブル経済が崩壊して就職難の時代になり、オウム真理教の地下鉄サリン事件に見られるように時代の精神が混迷を深め、社会に閉塞感が充満していった頃である。学校でのいじめの流行や、労働条件の悪化も影響した家庭内の育児放棄や児童虐待なども深刻になっていった。過度の競争社会が孤独を増幅させた。そして作者が社会人としてオフィス・レディの生活をしてきた二十一世紀初頭は、世界では新たな戦争や紛争、日本では自己責任論の横行と新たな貧困、といった現状が続いている。

そのように荒れて寂しい時代、人と人の血の通った絆が弱められ、個々の存在が分断された時代に、この詩人は成長した。ニュース沙汰になるほどではないが、父親との葛藤なども含めて、学校時代にはかなりしんどい嫌な目にもあったようである。根がまじめで素直な作者のことだから、殺伐とした風潮やおそらくは複雑な家族関係の中で人一倍傷ついたこともある。そのへんは多くを語らない作者であるが、この敏感で繊細なこころの詩集の遠い背景が何となく想像できる。

作者にとって第二詩集となるこの『いのちづな』は、「リアルタイムのこころの闇と光の詩集」である。巻頭に置かれた序

作者の生き方の変化を書いているながら、ここにはすぐれて直観的な時代の精神状況が表現されている。

自己責任論と競争社会の厳しく冷たい中で、無理をしてもはいつくばって生きなければいけない日々は、闇である。こころズタズタになってなおも助けなしであらかじめ決められた区分けコースを走ることば寂しい。

ある時何かのきっかけでオープンコースすなわち人々にもまれながらぶつかりながら自由に走る道に出る。へ人とぶつかって すぐくやりにくい、が、へつまずいてよろけたら／沿道にいた人がささえてくれた、のである。しかもへ沿道のはずが／同じ道の上だったし、ということだ。

同じ社会の同じ時代を生きる素手の私たち、すなわち庶民は、互いに励まし合い、時にぶつかり合っても、助け合い、そうして人間的な温かい何かが生まれるのだろう。そういうことが見えにくい現代社会の分断されたコースをあえて越えることで、孤独なひとりの若者が何かを見つけたのである。

この深い切実性と、わかりやすく親しみやすい語りがいい。

第一章は、自殺（自死）に関する詩群が中心である。過労や展望のない職場のあり方、そして日々の孤独感、などで生きる自信や気力をなくした人たちのことがリアルに詩作品になっているが、何と言ってもその一人が作者自身であったという重い体験がある。以前いた会社時代の体験だ。だから、言葉にウツがない。体ごと実感でぶつかる詩といった感がある。そして、自ら自殺の一步手前までいった作者は、今度は友人の自殺願望

に遭遇して共に悩み、感じ、「生きようよ」とささやくのである。いわゆる「こころの病」の問題を抱えながら、究極の命の連帯が実現していく様子を詩作品で読みながら、読み手はそれを他人事とは思えなくなるのである。ここに展開された切実な対話と心象は、日々厳しい状況に泣きたくなりながら生きていく多くの現代人のこころに共感を呼ぶであろう。

第二章は、そのような闇を抱えながらも前向きに生きている作者の何気ない日常が、月曜日から週末までスケッチされている。それも独自の内面的なイメージから周囲の人々との人間交流まで、シンプルなようでなかなか複雑である。いまを生きる女性ならではのこころの揺れ動きが伝わってくる。

第三章にきて、かなり明るい光がさしてきた。まだまだ自分の存在の悩みに苦しみながらも、あえてポジティブな人生哲理が見られて、さりげなくさわやかなそのことばに読み手も救われるようだ。

第四章は、作品タイトルにもあるように「こころのよはく」「ひだまり」のトーンである。まじめな人ほど「余白」がなくなり追いつめられる。最悪の場合、自殺にまで至ってしまうそのような現代の精神状況を第一章から第三章まで体ごと書いてきて、作者は詩集最後を優しく開いていく。体験者は語る、とといった感もあり、ことばに実感があり、決して説教調でないところもよい。他者と自己、そのメッセージは共に生きる方向へと開かれている。

姪の誕生はこうした作者の精神過程を大いに促進させたようだ。生まれたばかりの赤ちゃんを抱くことで、この詩人のことばに光が増した。近く結婚する恋人の存在も大きいに違いない。若い女性の伸びやかな向日性の表現に読者もしばし胸がキュンとなるだろう。しかし、それは闇がわかるからこそその光である。

新鋭の名にふさわしい新鮮さと切実性をもつこのリアルタイムの詩集の誕生に、ここからの祝福を贈りたい。そして、いまの世の中において、こういう詩集こそ、ひろく読まれてほしいと私は強くおすすめするものである。  
作品「オーイ」を引用して、この論考を終えよう。  
— 亜久津さん、出版おめでとう。

オーイ

オーイ、きこえるかい  
ひとりでやろうとしなくていいんだ  
というか　ひとりじゃ　わりだ  
そのまま消えないで　ひとりで消えないで  
手をのばして　返事をして  
呼んでよ

オーイ